



ガリ国連事務総長の会見を司会する理事長
(93.2.18)

日本記者クラブ会報

第287号
1994年
(平成6年)
1月10日発行

東京都千代田区内幸町一ノ二ノ一
日本プレスセンタービル 100
©社団法人 日本記者クラブ
電話三五〇三一二七三(代)

謹賀新年

疾風知勁草 (後漢書・王霸伝)

理事長 鮫島 敬治

強い風が吹くと、弱い草は倒れて、そこで初めて根のよく張った茎の強い草がわかるように、困難

な時こそ、人間の心がよく見える、ということであろうか。

× × ×

変化と激動の時代とは、新たなエネルギーが芽を吹き登場してくる時代である。だがそれは、既成の権威とか暖簾、あるいは市場で圧倒的なシェアを持つ商品が、目がさめてみると音を立てて崩れているという時代でもある。奇想天外な夢も含めて、あらゆる可能性が生成し発展する側面と成熟し衰退していく側面とを、合わせ持っている。なにごとによらず、新しいチャンスがふんだんに存在すると同時に、チャンスを見逃さずして

しまふ危険性が満ちあふれている時代でもある。

しかもこの一兩年来の内外の動きは、状況が「戦後の荒廃」の渦中にあることを示している。米ソ冷戦下では当然とされ自明の理とされていた構造、政策、制度、秩序など、諸々の枠組みが適応力を失ったのに伴い、それに代わるイニシアティブが目白押しに競い合っている。シアトルでのAPEC首脳会議は、その象徴的一幕であったろう。が、ひとくちに軍需から民需への転換と言っても、「特定少数者による非公開型」から「不特定多数向け公開型」への構造転換も伴わなければ、戦後不況の需要不足の打開はおろか、戦後復興への再編や是正への図式は、さらに不透明を余儀なくされ続けるかもしれない。

他方、NIESからASEANそして中国沿海部に拡大する東ア

シア経済圏の「躍動」にひきかえ、日本では産業空洞化が見え隠れする。大戦後の米国が、欧州復興へのマーシャルプラン展開期間中に、技術開発と経営革新を進めた足跡をどう見るか。一九七〇年代以来、日本に突きつけられてきた①安全保障②援助協力③市場開放の「三つのツケ」を今後どう払っていくか。この主体的対応と並んで、日本自らのイノベーションこそ目の離せないテーマだろう。

さて、政治不信が叫ばれるにせよ、不信の目は政治家だけにではなく、マスコミのあり方にも厳しく向けられていることを念頭に、通り一遍のやりとりで終わらぬように——とお願いして、七社七人の代表選手に存分に組み組んでもらったのが、昨年七月二、三両日の「九党党首に聞く」だった。また、クラブ活性化への条件として掲げた企画委員の大幅増強も皆さまのご協力で、政治・経済・国際・外交の分野で実現できた。幅広いご支援への感謝とともに、会員各位のご健康をお祈りしつつ。

(日本経済新聞社専務取締役)

新春随想

権力に対する砲列

酒井新二

戦後の日本のジャーナリズムは、いったい何を学んできたのであろうか。最近のマスコミ界の状況を見ると、そういう感想を持たざるを得ない。事實は、多くのことを学んだに違いない。戦前・戦中の苦い記憶を忘れたわけでもあるまい。しかし結果的には何も学ばなかったに等しい。「言論の衰弱」が言われてすでに久しい。いうまでもなく戦前・戦中と戦後、特にテレビ出現以後のマスコミ界の環境は根本的に変化している。しかしその変化は「言論」の視点からいえばすべて好ましいものである。にもかかわらず、ジャーナリズム特に「政治ジャーナリズム」や「言論」が著しく衰弱してきたのはなぜであらうか。

「言論」もハングリーの中でしか育たず、豊かさの中では墮落する、とでもいうのであろうか。戦後のマスメディアはその情報量においても、中身の多様性においても、技術面においても飛躍的な発展を遂げた。しかし「言論」の質は、それらに反比例して衰弱したといっている。日本の政治ジャーナリズムは、戦前・戦中の軍国主義との闘いにおいて惨めな敗北を喫したことから多くのことを学んだはずなのに、その教訓が発芽し、育ち、開花したとはいえない。それは日本人特有の歴史に対する健忘症によるものだといって片づけるわけにはいかない。

このことは日本の「戦後政治」についてもいえることである。この上ない条件に恵まれながら、「民主主義」について学ぶところ極めて少なかった。経済的豊かさによって、贅肉は増えたが、民主主義の精神と実体は萎えていった。その意味で「戦後政治」と戦後の「政治ジャーナリズム」とはパラレルな道を歩んできたといえる。

五五年体制が成立し、保守合同によって自民党の一元支配体制が確立するにつれて、日本の「政治」が衰弱していったように、政治ジャーナリズムも同時に衰弱していった。日本社会が「経済」に集中し、日本資本主義が「企業社会」に編成されるにつれて、「新聞」もその中に埋没していった。「言論」は後景に引込まれ、「コマーシャルリズム」が前面に押し出された。テレビ・ジャーナリズムが、この傾向に拍車をかけた。エレクトロニック・メディアの圧倒的影響

響力に対してプリント・メディアは新しい戦略を打ち出すことができず、ズルズルとその後について行った。テレビに對抗する新聞の武器の一つはその「言論性」の回復であったはずなのに、新聞はそれを怠ってきた。

「政治」と「記者」の真剣勝負の場であるべき「記者会見」まで、テレビに合わせて「ショー化」し「サービス化」した。記者会見はテレビの時間に合わせるセツトされ、国会審議などからの「代表質問」という、なれあいの形式に堕していった。「記者会見は政治家の記者に対するサービスだ」などという、ふざけた発言が一人前の政治家の口から飛び出すこと自体、政治とプレスとの関係の未熟さを物語るものであり、政治に対する言論の衰弱ぶりを示すかつこのエピソードである。

「夜討ち朝駆け」的取材をやることは結構だが、それは政治家に言われるまでもなく、新聞、テレビの側から発想されるべきものである。

昭和天皇の病状取材の際のテントの行列なども、ジャーナリズムの信頼感を墜とすものであった。政治腐敗報道も単にジャーナリズムの勝利などとはいえず、検察や警察すなわち官側からのリークに負うところが大きいことを知らなければならぬ。「番記者」の廃止や、さらに「記者クラブ制」そのものの、廃止を含めた見直しが必要な時に来ている。「派閥政治」の泥沼にのめり込んで、派閥のボスから

さかい しんじ会員

一九〇〇年生まれ、東京都出身。東京大学法学部政治学科卒。四七年共同通信入社。政治部長、パリ支局長、編集局長、常務理事、専務理事などを経て、八五年社長、九一年から相談役。七八年から八一年まで日本記者クラブ理事長。現在、名誉会員。



「派閥記者」は身内でありマスコミ操作の道具である、と思われるような記者やシステムは打破しなければならぬ。

民主主義社会における「新聞」の役目は、ニューヨーク・タイムズのジェームス・レストンが少壮のころに書いた「新聞の砲列」の中で強調しているように、「新聞は権力に対してイエスマンになるのではなく常にかまびすしい砲列であるべき」なのである。それは単に、「リベラルなジャーナリズム」や「リベラルなジャーナリスト」を唱えるだけでは足りない。ジャーナリストが持つべきものは観念的な、イデオロギーとしての「リベラリズム」ではなく「権力からの自由」というものを現実実践できる勇気なのである。

底したメディア操作も、その露骨な例である。

「権力からの自由」である以上、政治ジャーナリズムは「国家」や「民族」の枠を超えなければならぬ。しかし現実の日本のジャーナリズムは「権発言」問題をしても、「国家」どころか「業界」の枠を出ることもできていない。「権発言」の中身はいろいろな意味でお粗末なものであったが、いわば無防備の発言を「スクープ」した側の態度も決してほめられたものではない。

放送や報道の「公平原則」は常に権力の側から強調されるものである。「言論の自由」を高く掲げた修正憲法第一条を持つアメリカでも、「公平原則」が違憲か合憲かの長い論争があり、一九八七年になってようやくFCC（連邦通信委員会）が「公平原則」を違憲と判断し、廃止する裁決をしたのである。

日本では放送法における「公平原則」の違憲性が学界ではともかく、放送界自体で論議されることはなかった。報道の「公

正」とは単にバランスをとる、いわゆる「客観報道」の技術的問題ではない。本質的には、社会的正義を論理性と人間性をもって迫ることである。その意味で、どんな社会的立場、社会的視点をとるかの問題と無関係ではあり得ない。政治の公正

が社会的正義の確保であり、それがいかなる社会的立場に立つかに関わるのと同様である。民主主義社会においては、その基準は「市民」の立場であるといえる。「権発言」問題はまことに残念な事件であったが、これを機に、眠っていた「言論の自由」論議が起り、衰弱した言論に活が入るきっかけとなれば幸いである。

真のジャーナリズムを作るものは結局組織ではなく、一人ひとりのジャーナリストであり、その思想であり、その世界観である。CBSではなくエド・マローなのである。しかしその道はマローの終末が示すように決して安易なものではないことも確かである。

創立二十五周年迎える 記念の年にふさわしい事業を

明けましておめでとうござい
す。

今年には日本記者クラブが設立さ
れて、満二十五周年になります。

一九六九年、産声をあげたときは
日本新聞協会の一隅に細々と事務
局を置くのみ。それが現在では十
階ホールを合わせて、一、六七六
平方メートルの施設を持ち、会員
数も当時、一三七社、八三九人だ
ったのが、二一九社、二、八四七
人と大幅に増えております。良

ぞここまでという感を新たにいた
します。

十五周年のときには、創立記念
日の十一月一日に盛大な記念パ
ティーを開いたのを始め、記念出
版として「とっておきの話」と
「ゲスト サイン集」をつくり、
全会員に配布いたしました。今回
はどうするか、今後、総務委員
会、理事会で検討していただきま
すが、四半世紀の祝いにふさわし
い事業を行いたいと思っております。
こんな事業をやったかどうか
というご提案のある方は事務局ま
でお知らせください。

十八日の新年互礼会員懇親会を
前に、「九三年アンケート」の結
果がまとまりました。総投票数は
四九〇票。激変の年にふさわし
く、意外な結果が続く、満点はお
ろか、九点も無し。最高得点は八

点で、それでも十四人の方が表彰
対象になったのは立派。

特に難問だったのが「十二月一
日現在、わが国の内閣総理大臣は
誰か」、投票当時、まだ一介の参
院議員だったという失礼かもしれ
ませんが、細川護熙さんの名を
書いた人がいるとは思いませんで
した。さすがは先見性に富む会員
ぞろい。日本記者クラブ、何と二
人の正解者がいました。熊本放送
社長・小堀富夫さんとNHK鹿児
島放送局長・川窪正昭さん、企画
委員会でお二人に特別賞を贈るこ
とを決めました。互礼会の席上、
最高点の方々とも、斎藤委員長か
ら表彰していただきます。

昨年末のクラブ行事は、三日の
カルロス・メナム・アルゼンチン
大統領、二十一日のカルロス・サ
リナス・メキシコ大統領と二人の
大統領に続いて、二十二日、ブ
ロス・ガリ国連事務総長の記者会
見、そして二十八日、羽田外相の
昼食会で幕を閉じました。同事務
総長は二月に続いたの訪日。「秋
ごろ再訪日するが、またクラブを
訪ねるよ」といった通り、慌ただ

しい日程を割いて訪ねてくれまし
た。韓国、北朝鮮を訪れる直前と
あって、クラブの会見としては午
前九時半という、異例の早朝会見
になりましたが、熱気ある質疑が
交わされました。

この他のゲストは、二日「マル
バト・トラウイ・エジプト大使、
九日「ティモシー・ワース・米国
務省顧問、十四日「ニコラス・ブ
ラット・米アジアソサエティー会
長、二十日「小粥正巳・公取委委
員長。それぞれ、注目すべき会
見、研究会、囲む会となりました。
また、十七日には、今春、臨
界を迎える敦賀の高速増殖炉「も
んじゅ」を日帰りで見学しました。

さて、ことしもクラブにとって
は大変忙しい年になりそうです。
イスラエルとPLOの暫定合意に
より急速に進んでいる中東和平に
時を合わせ、ムバラク・エジプト
大統領、ラビン・イスラエル首相
の訪日が予定されるなど、各国要
人の来日が始まる押しです。新し
い研究会も発足する予定です。ご
期待ください。

(専務理事 白木東洋)

Arthur Marshall
22-12-93
1993/12/22

ガリ国連事務総長の記念署名(12.22)

■ 会議報告 ■

第218回企画委員会

(12・7 宴会場)

「94年予想アンケート」の問題を作成したほか、十二月、一月のクラブゲストについて協議した。

出席 斎藤委員長、村上、下村、石川(弘)、田勢、石川(莊)、根岸、千

野、宇治、秋山、藤原、前田、小宮山、黒田、川戸、角谷、宮智、宝子山、ヒルシャー、友田、新井、村野の各委員。

第196回会員資格委員会(書面)

書面で一月一日付の会員入退会を審査し、理事会に答申した。

会員の著書(ご惠贈いただきました)

コラムの歯ざしり「産経抄」傑作選4

(サイマル出版会 一、六〇〇円)

石井 英夫

フイレンツェの職人たち

(JTB出版事業局 一、八〇〇円)

朽見 行雄

招待券

朝日新聞社から「小林古径展」、東京新聞から「モネ展」、平野光男会員から「ボイマンス美術館展」、大丸ミュージアムから「北斎展」の招待券をいただきました。お礼申しあげます。

「ちょっと、日清戦争の犠牲者、調べてくれへんか」。社会部デスクの辻本芳雄さんが言った。銀座に本社屋があった昭和三十六年十二月、その年の全国交通事故死者数は、一万二千八百人を超え、史上最高を記録しようとしていた。

警視庁クラブにいたわたしは、加藤祥二デスクのもとで、交通事故防止キャンペーンの年末連載企画をたてていた。夕刊が終わって、遊軍もお茶を飲みにでかけ、ふだんは騒がしい社会部のデスク付近も、何かけだるい雰囲気があったよっているなかで、連載タイトルを議論していたところだった。資料部で調べた日清戦争の日本

交通戦争

に、日本の交通事故死亡事故の状況は戦争状態だった。

警視庁七社会で、コロシ、タタキを担当して、現場に飛び、聞き込み、夜回りに明け暮れていたとき、自分でもおかしいなと思ったことがある。コロシとなれば捜査本部がおかれ、警視庁捜査一課の

「ジャーナリストのつくった言葉」

ベテラン刑事たちと所轄署の捜査員が数十人動員され、捜査の動きは社会部記者の熾烈な競争の対象となった。だが、ひき逃げはどうなる。あきらかに「コロシ」ではないか。交通事故となると警視庁の捜査体制も貧弱だ。

暴力によって命が失われて

いるのは同じなのに、なぜなんだ。そんな思いでコロシを取材しながらも、交通非常事態の現場を取材し、孤獨な交通キャンペーンを続けていた。加藤さんはずっと励ましてくれていた。ズバリ、「交通戦争」のタイトルをつけた連載は、師走で満杯の

記事を押しのけて、社会面で始まった。数回続いたころ、テレビの漫才で「近ごろ、交通戦争というそうで、町も危なくて歩けない時代ですなあ」とやった。

これを聞いて、「しめた」と思った。社会面の原点は話題性にある。しかも漫才という場で話題になったことは、交通キャンペーンが一人歩きしてくれる可能性を持ったことになる。

世論が起こり、期待どおりに政府が動いた。「交通事故をなくそう」と政府が立ち上がり、国民的キャンペーンがはじまったのは、翌年である。

読売新聞OB 小倉貞男

ハラハラ相場

ワーキングプレス

それは、J R東日本株上場から始まった。

十月二十六日の上場の朝、東京証券取引所は久しぶりに緊張に包まれた。私が東証の「兜俱樂部」担当になって一カ月余り。この間の株式市場は、平均株価が二万円から二万五百円の間に小動きする、政府のPKO（株価維持策）による管理相場だった。「こんな面白みのない市場では個人投資家が離れてしまう」という悲鳴も聞こえた。

そこに登場したJ R株は久々のビッグ・イベント。証券会社幹部からは「J R上場を市場活性化の起爆剤に」「小さく産んで大きく育てたい」という期待の言葉が方々で聞こえた。ところが、ふたを開けてみると予想以上の人気で、初値は公募価格の三十八万円を大きく上回る六十万円になってしまった。そして「これは過熱気味」という危惧の通り、翌々日には五十一万円まで急降下。これに連れられ、東証の平均株価も二万円の大台をあっさり割り、十日後には一

万八千五百円台まで下がってしまった。

大蔵省の日高証券局長は以前、「PKOは市場のイリュージョン（幻想）」と語ったというが、J R株はPKOがまさに幻想だったことを白日のもとにさらしてしまったと言える。

政府による下支えを失った株価は、その後、証券関係者の予想外のスピードで下がり続けた。

幻想だったPKO

小林利光

静かだった兜俱樂部も一転あわただしくなった。株価下落の都度、解説めいた原稿を出稿したが、しまいには「今日は何を書こうか」と料理の仕方に困るありさま。

暴落の最大の原因は、景気と企業業績の悪さだ。平均株価が一万七千円を割った時点で、ある証券会社の株式部長にコメントを求めたところ、「景気の状態

は株価が一万四千円台をつけた昨年八月よりむしろ悪い。当面の下値は一万五千九百円」という答えが返ってきた。果たしてそこまで下がるか半信半疑だったが、五日後の十一月二十九日には一時的だが一万五千六百円まで急落してしまった。

大手証券の幹部も、夜回りの記者に「株式市場は日本株式会社の実態を写す鏡。一万六千円

という株価は日本経済の実力」と正直に認めた。いつまでたっても出口の見えない不況、政府の景気対策へのモタモタぶりに株式市場が反乱を起こした格好となった。

クールにながめれば、株価は正常な水準に戻ったと言うこともできる。ただ問題は金融機関や企業の経営が株価の含み益に大きく依存しており、株価が下

がると膨大な不良債券の処分に支障をきたす構造になっていることだ。株価下落は、パブルの負債の大きさを改めてクローズアップさせた。

証券関係者の中では、今の日本の状態は、同じように大型のパブルが破裂した一九二九年大恐慌時代当時の米国と酷似しているとの見方がある。その説に従えば、景気も株価も今世紀中は本格回復は無理ということになる。

肝心の景気対策は、政府高官たちの前向きな発言は多いものの、十二月中旬時点では、まだ具体的な姿を現していない。証券業界からは、減税や土地流動化で「予想を超える思い切った対策」を求める声が強いが、一方では「これだけ景気が冷え切ってしまったら、エンジン（エンジン）をかけるのは難しい。株価は当面ダメ」という悲観論も聞かれる。

こばやしとしみつ氏 一九七九年毎日新聞入社 青森支局 整理本部を経て八八年から経済部 現在 証券担当

実名・写真報道

ワーキングプレス

夜六時のBBCテレビ定時ニュースを見ていた私は「アッ」と叫んだ。日本ではありえない映像が、ブラウン管に映し出されている。犯行当時わずか十歳、少年被告人二人の顔写真だ。

翌日の朝刊各紙の大半も、一面に驚くほど大きなサイズの顔写真を掲載していた。実名はいうまでもない。日常生活や家庭環境も克明に報道された。

英国リバプールで昨年二月に起きたジェームズ・バルジャーちゃん(当時二歳)事件。誘拐・殺人罪に問われた少年A、Bに対し、ブレンドン刑事法院の判事は十一月二十四日、事実上の終身刑判決を言い渡した。

判決自体にひっかかりはない。よちよち歩きの坊やを連れ出し、レンガや鉄棒で三十回も撲打したうえ線路上に放置した残忍な犯行を考えれば、当然といえた。ショックを受けたのは、A、Bの身元公表を禁じた措置を判事が判決後に解除し、英国のマスコミが何のためらいもないかのように実名・写真報

道に踏み切ったことである。

《未成年や刑事責任を問えない被告人については匿名報道とする》。駆け出し時代にたたき込まれたこの原則を当然のように思ってきた日本人記者としては、ジャーナリズムの先輩国・英国の意外な側面を見せつけられた思いだった。

主要紙の編集デスクに次々と電話をかけた。

少年被告の「罪と罰」

鳥海美朗

「なぜ、実名・写真報道に踏み切ったのか。」

答えを要約すれば、「今回の事件では当然ではないか」というものだ。写真は逮捕のずっと以前のものであるから、将来にわたって被告人を特定する資料にはならないとの意見もあった。

背景には、「比類のない残忍な犯行」(判決)への強い怒りの世論がある。英国は六四年に死

刑を廃止するなど高度の人権意識をもつ国だが、同時に「法による正義」を守ろうとする意識も強い。

しかし、と思う。

A、B二人の生い立ちや生活基盤を掘り下げて伝え、議論を喚起して同種事件の再発を防ぐことが報道の目的であったならば、実名や顔写真までが不可欠だったかどうか。救いは、ガー

ディアン紙デスクのコメントだった。「十年、十五年後の二人の写真を手しようとは思わない。更生の芽をつみたくはない」。

厳密にいうと、判事は「少年の自宅住所や学校名の公表」は禁止したままだったし、A、Bの両親や関係者への取材ラッシュの行き過ぎも指摘された。判決の二日後、判事は「被告人に更生の機会を与えることも公共

の利益に合致する」との判断から、今後は拘留所の写真やイラスト、家族を含む関係者から得た情報も公表してはならないと改めて命令している。バランスを欠いた報道への警告でもあった。

英国より日本のマスコミの方が人権保護に優れているというつもりはない。匿名報道が自動的に関係者の人権を保障することにはならないからだ。少年A、Bの「罪」と「罰」は、犯罪報道の難しさを問いかけている。

とりうみ よしろう氏 一九七三年産経新聞入社 大阪社会部次長 外信部次長などを経て 九一年一月からロンドン支局長



有罪判決の少年2人を乗せた護送車を報道人と市民が囲んだ(11.24) ロイター



ローザンヌ (34)

I O C

改善されたメディア対応

竹 内 浩

チェスターが立候補していた。英語を母国語とする記者の数が圧倒的に多かった。

以前には見られなかったこうしたメディアに対する配慮が、会長の会見だけではなく、様々な形で表れるようになってきた。

バルセロナ五輪後に、IOCはインフォメーション・ダイレクターのポジションを設け、英国人のアンドルー・ネビエ氏を民間企業から迎えた。プレス・ダイレクターには、英、仏、独、西の各言語を操りながら、各国記者団の質問をテキパキとさばくフランス人のミシエル・ベルディエ女史が残っている。

現在スポークスパーソンは従って二人制を採っている。理事会では午後一時すぎと六時すぎの二度の定例ブリーフィングを、原則的にベルディエ広報担当が行う。しかし、重要問題の記者会見では、発表を行う専門委員会の委員長にネビエ広報担当が同席する機会が多くなっている。そこで彼は補足説明やときに背景説明などを行う。

理事会は、年に二度か三度しか開かれない。総会は原則的に年に一度だけだ。理事会を毎回取材する記者は国際通信社の記者を中心に十人程度。ローザンヌ本部での理事会取材は、オリンピックに集まる数千人のプレスが作り出す熱気とは無縁の静かな世界だ。

開催都市決定やオリンピック開催のときの理事会、総会しか取材しない記者を考慮して、ネビエ氏は広報に務める。

二月十二日に開幕、ノルウェーを舞台に行われるリレハンメル冬季オリンピックのプレスセンターでも、数百人の臨時IOC担当記者を相手に奮闘する姿が見られることだろう。

アトランタが一九九六年五輪開催都市に決定した九〇年の東京IOC総会後に、オリンピックは開催以前の招致段階で莫大なカネが浪費されると批判が出た。IOCの金権体質を非難する本も英国の二人のジャーナリストによって出版された。こうしたタイミングとネビエ

エ氏のIOC入りとは、無関係ではない。

ローザンヌに本部のあるIOCは従来、理事会や総会開催中以外に、発表事項があるときは、ジュネーブに詰めている各報道機関の出先にファクスで知らせていた。昨年からは、こうした発表の回数を増やし、内容をきめ細かく充実させて、ロンドンやパリに駐在しているIOC担当記者にも直接、ファクス送信してくるようになった。メディアへの対応で、IOCは受動態から能動態に変わりつつある。

たけうち ひろし氏 一九七七年共同通信入社 運動部 バルセロナ支局を経て 九二年十月からロンドン支局記者



サマランチ会長の会見にも変化が
写真 共同

ク ラ ブ ゲ ス ト

マルバト・タラウィ
ト大使
駐日エジブ



12.2 (木) 懇談会
司会 有島真喜子元委員
通訳 矢野智恵子
出席 32人

カルロス・サウル・メナム
ゼンチン大統領
アル



12.3 (金) 記者会見
司会 佐藤毅理事
通訳 津村クリスティーナ
出席 91人

エジプト初の女性大使。オースト

リア大使のほか、国連の婦人差別撤廃委員会委員長や婦人の地位委員会議長なども務めた。イスラム原理主義の台頭について、「権力を手に入れるために宗教を利用してはいるにすぎない。彼らは急速な近代化について行けない人々だ。彼らの言うイスラムのルールは真実でない。西側のマス・メディアはこの誤ったイスラム観を後押しする格好の報道をしがちだ」と。

★イスラムは夫婦別姓です

「ベールで顔を覆えというのは、イスラムの教えに反している。わいせつでない程度に身を包めということであって、『お化粧』のように自分をくるめとはいっていない。自身、金ボタンの付いた鮮やかなブルのスーツに花柄のスカーフ姿だ。

八九年大統領に就任。当時のイン

フレは年率五〇〇％。財政赤字の元凶だった国营企業の民営化を手段に、固定為替制導入、規制緩和と経済の自由策を次々と断行した。その結果、インフレ率は七％まで沈静化した。税金の未払い率も改善し、「ようやく脱税が罰せられるようになった」。

新生アルゼンチンとして近隣諸国や米国だけでなく、アジア諸国との関係も強化したい、と。

「イスラム教はユダヤ教やキリスト

教にもまして、女性の権利や経済的自立、アイデンティティを認めている。私もイスラム法に基づいて、結婚後も夫の姓には変えず、生まれるときからの姓を名乗っている」。

(12・2 タラウィ大使懇談会)

★米国の食糧備蓄ピンチです

この日の夕刊一面はコメ関連記事で一杯。トップにジュネーブ発のドゥニ議長調停案、ソウル発は金大統領の国民への謝罪特別談話、その横に社会党の動向と「決断間近を示唆」の細川首相の国会答弁——。午前中から前の日比谷公園では、開放反対集会、黒塗りの先生方の車

ティモシー・ワース 米国務省顧問

冷戦終結で、安全保障の概念も変化しつつある。①平和維持②核不拡散③持続可能な開発——がこの面でのクリントン政権の柱だ、と。③との関連で、人口問題の重要性を強調。

「過去三十年間で世界人口は倍増した。労働人口の移動もやっかいな政治問題になる」。九月にカイロで世界人口会議が開かれる。人口爆発の抑制という観点から、日本政府がODA支援の基準を見直し、この問題で積極的役割を果たすよう求めた。



12.9 (木) 記者会見
司会 村上吉男委員
通訳 長井鞠子
村崎恵子
出席 46人

が長々と道路に駐車していた。そのラウドスピーカーの音が消えて間もなく始まった、ワース国務省顧問の会見では、人口問題との関連で、次のようなドッキリ発言も。「米国の食糧備蓄も危険なところまで落ちていく。放置してヘタをすると国際価格の上昇や飢餓のおそれも——」

(12・9 記者会見)

ニコラス・プラット 米アジア・ソサエティー会長

先のAPEC首脳会議での最大の成果は、九四年にもインドネシアで首脳会議が開かれることが決まったことだと言う。「APEC首脳会議は、クリントン大統領の決断であり、これは世界のメーンストリートが太平洋に移ったことのシンボル。米国は其中で重要な地位を占めた」と考えているが、アジア諸国の戸惑いも、コンセンサスの重要さも米国は良く知っている」。



12.14 (火) 研究会
「クリントン政権」(6)
司会 三森和彦委員
通訳 キャサリン・スターリング
出席 59人

プロフィール

◇個人D会員

(十一月一日付入会の個人D会員、特別賛助会員の方々です。)

言葉を刻む話

「コールド・ウォー」の

語源を訪ねる

新しい言葉や表現を生み出すのに英語ではコイン (coin 貨幣の鑄造) という動詞が使われるのはおもしろい。言葉の芸術家ともいえるべき文章の達人を「言葉の名士 (WORD SMITH)」というのも、名刀を打つがごとく作家が筆を持って苦闘する情景が目につく。

そんな「言葉の名士」のひとり、作家の井上ひさし氏が近著『ニホン語日記』で米国の大ジャーナリスト、ウォルター・リップマンにふれ、「コールド・ウォー」(冷たい戦争) という言葉をリップマンが使用し、普及させたと書いている。

念のために追跡調査しているうちに、米言論界の意外なミニ・ドラマが浮かび上がった。ピューリッツァー賞二回受賞と三回受賞の二人の大記者が新語コールド・ウォーのコインナ (製造者) の名譽をめぐって激突(?) しているのである。

ニクソン元大統領のスピーチライターで、現在は政治評論家のウィリアム・サファイアー編著『政治の事典』によると、コールド・ウォーと

いう言葉は、政治記者ベイヤード・スウォープが親友の著名な政治家、実業家バーナード・バルークのために一九四六年に起草した演説草稿に含まれていたが、当時は少し表現が強すぎるとして削除され、翌四七年四月、サウスカロライナ州議会でのバルーク演説で初めて公式に使用された。

間もなく、コールド・ウォーはリップマンの新語という世評が広まったので、バルークはひんぱんにインタビュにに応じてスウォープの鑄造説を強く押し出した。リップマンは、一九三〇年代にすでにフランス語で la guerre froide (冷戦) の言葉を見たスウォープに伝える。そこで五〇年五月十日、ピューリッツァー賞三回受賞のスウォープが二回受賞のリップマンに手紙を送り、自分が三〇年代末にこの新語を思いついたこと、フランス語での新語は目にしたことがないこと、四五年の終戦直前に小さな集まりで実際に自分が使用していることなどを説明する。手紙は「この言葉を最初に使ったのは自分であると信じ続けています」と結ばれている。リップマンの反論は伝えられていない。

共同通信OB 仲 晃

写真部

写真 塩入 正夫

〔1989年毎日新聞写真部入社 昨年9月中旬から一カ月バングラデシュでミャンマー難民を取材 連載「安住の日はいつ…ミャンマー難民報告」で東京写真記者協会賞企画部門賞(海外の部)を受賞〕



重い問いかけ

子供たちの暗い目と固く結んだ口元に、思わず引きつけられた。有刺鉄線のトゲとトゲの間を小さな手でつかみ、もの言いたげにこちらを見つめている。きっと奥歯をぎゅつと食いしばっているに違いない。それでもしていなければ、今にも泣き出してしまいそうなのだ。それを懸命にこらえている様子がひしひしと伝わってくる。

似たような体験を私は思い出した。まだ戦後間もないころ、進学のために上京した時、早朝の上野駅近くで、足下からじっと見あげられた、あの暗い視線だ。東京にも戦災や引き揚げで親を失い、親類など身の寄せどころも知らない子供たちが、集団で野宿していた。今あの子らも五十歳を超えている。きっとどこかで生活の根をおろし子育てを終えているだろう。

社会が安定してさえいれば、人は成長につれて生きるすべを身につけられる。しかしミャンマーへの帰還を待ち、バングラデシュのトランジット・キャンプで暮らす難民たちは、帰国のめども立たない。かりに親と共に帰ったとしても、安定した暮らしを始められる保障はない。複雑な彼らの表情は、有刺鉄線の外側にいる大人に向けて、僕たち・私たちの未来をどうしてくれるの、と重い問いを投げかける。

(藤原 房子)

「日本記者クラブ賞」候補者の推薦を

取材、報道・評論活動などを通じて、ジャーナリストとして顕著な業績をあげ、ジャーナリズムの信用と権威を高めた個人を、一月三十一日（月）までに候補としてご推薦ください。会員およびプレス会員に属する方々が候補資格者です。詳細につきましては、事務局（〇三―三五〇三―二七二二）へお問い合わせください。

●囲碁同好会〇

一年を締めくくる恒例の「大軒杯」争奪囲碁大会（十一回）が、十二月十八日（土）午前十一時からクラブ宴会場で行われました。参加者は三十四人。四クラスに分かれて「予選」を行ったところ、松本昭男七段、日比野和幸四段、内川芳美三段、竹尾新吾二段が決勝トーナメントに進出、四人で準決勝を戦いました。注目の決勝戦は、内川三段を破った竹尾二段と、松本七段（日比野四段



会長賞を受けとる松本七段

は、列車の都合でやむなく不戦敗）との五子局となりました。結果は松本七段の勝ち、初の二度目の優勝を果たしました。新年の例会は一月二十九日（土）です。

「予想アンケート」の投票は二十二日までに

一月十八日（火）に行われる恒例の新年互礼会員懇親会で、昨年の「予想アンケート」の結果が発表されます。

今年のアンケートは、今号と一緒に送りしました。郵送投票も受け付けます。懇親会に出席できない方は、二十二日（土）までに事務局へお送りください。

寄 贈 書

日本民間放送年鑑93
電通広告年鑑93・94

日本民間放送連盟
電通

レーニン像を倒した女たち（秋尾沙戸子著）

サイマル出版会

アセアンとベトナム

東南アジア発展の鍵（三宅和助著）

〃

事務局の異動 十二月二十一日付で石川洋（40）を採用いたしました。上智大外国部卒で、これまで勸フオーリン・プレスセンターで、外国人記者の取材協力などに当たっていました。なお、森田能理子は昨年末で退職しました。

会員現況 法人会員 一四九社 基本会員 八二三人 個人会員 一、七二五人 法人・個人賛助会員 七〇社 二二七人 特別賛助会員 五九人名誉会員 一三人 計 二一九社 二、八四七人

訃報 加藤愛子会員（特別賛助）が十一月十七日心不全のため逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

一 月 の 行 事（12月25日現在）

12日（水）午後2時～3時30分 「94年経済見通し」 松本和男 一橋大学講師
14日（金）午後3時～4時30分 「94年経済見通し」 内海亨 慶応大学教授
18日（火）午後6時～8時 新年互礼会員懇親会

（行事案内電話）〇三―三五〇三―三七六四

あけましておめでとうございます
今年もよろしく願っています

事務局一同

会報委員長 深川 誠 委員 松井 章

村上紀子 栗田 格 梅田光男

事務局連絡 長谷川 河野

（電話）〇三―三五〇三―二七二二